保育の現場から

小さな園の歩みから

飯利美知子

私の保育の現場は、茨城県にある本年度の園児数四十二名の小さな私立幼稚園です。五年前、園児が三十四名に激減した状況を保育者として引き継ぎ、「遊びを大切にする保育」を方針として打ち出して子どもたちと過ごしています。地域の幼稚園事情は、体操・英語・絵画・習字教室などを保育に導入する園や、園児獲得のため保育日数を保育園並みに増やす園が多く、私が引き継いだ時に「その流れに追随したほうが……」との声もありました。でも、何よりも「子どもたちが元気に・楽しくすごす幼稚園」でありたいと思いましたし、その様子が外に伝われば、きっと園児も増えるはず！　と考えたのです。

一年目・二年目は、「遊びを大切にする保育」の基礎作りと遊びの中での子どもの育ちをどのように発信するかに、試行錯誤の日々でした。

園長・保育者二名・事務一名というギリギリの体

制の中、園バスの運転手にも手伝ってもらい、月二回の見学日を始めたり、「お友達と思いっきり遊びます！　遊びを通して豊かに成長します！」のキャッチコピーをポスターにして、お母さんたちが地域のあちらこちらに貼ったりもしました。また、園児が二十四名になってしまった二年目の運動会やおゆうぎ会は、卒園生の応援参加で盛り上げたりとみんなで知恵を出し合って園の急場をしのいだのでした。

そのような状況での三年目に、十一名の三歳児と三名の四歳児が入園しました。それは、見学日を通して「遊びを大切にする保育」の楽しさが伝わり始めたとの手応えを感じたことでしたし、園の存続が守られたことでもあり、十四名の子どもたちが「希望の光」のようで大きな喜びとなったのです（それでも、三年目の全園児数は二十六名でしたが……）。そして、入園した一人ひとりは、自分らしさを発揮して園生活を送れるようになるまでの日々を刻みながら、この三年間を歩んできました。中でもR（男児・一人っ子）の歩みは、平坦な道のりではありませんでした。

Rは、入園前の一年近くの間、月二回の見学日にほとんど休まず来ていて、お母さんと一緒に工作コーナーで遊ぶ姿がよく見られました。自分のイメージをもち、お母さんに手伝ってもらいながら一所懸命作り上げようとしていて、お母さんもRが作品を完成させるうれしさを体験するようにとていねいにかかわっていて、「作る遊びが好き」との印象がありました。そしてその様子に、「見学を通してなじみのある幼稚園で、好きな遊びを楽しみながら園生活を送ってくれるだろう」と思われたのですが、Rが自分らしさを発揮するまでには、かなりの時間を要することになったのでした。

入園当初の激しい泣きに、お母さんはRが泣きながらでもバイバイをするまで寄り添い、私も「安心して過ごせるように・好きな遊びを楽しめるように」と、心を寄せてかかわったつもりでした。でも、登園時の泣きがなくなって友達と遊ぶようになっても、どこか心から楽しんでいないことが伝わってくるR……。そのくすぶりは、時に頻尿になったり、「給食のキャベツがイヤ！」に凝縮されて登園しぶりになったりして、年中組の秋ごろまで続きました。

Rの抱えたくすぶる思いは感じるのだけれど、それを晴らしてあげることがなかなかできずに時間が流れていく……。保育者としての閉塞感をかみしめる日々でもありました。

そんなRが、スルスルッとくすぶりから抜け出したのは年中組の冬ごろで、同じく三年保育で入園したH（男児）とのかかわりからだったと思います。

Hは二歳違いの弟がいて、お母さんの実家の田んぼや畑で遊ぶ体験が多く、活発でいつも動き回っている印象で、それまではRとの接点は少ないほうでした。そのHは、年中組の秋ごろに突然ジャズに興味をもち始め、「せんせー、ソニー・ロリンズしってる？　スタン・ゲッツは？」とか、「オルター・ディビス・ジュニアはピアノ、リー・モーガンはトランペットなんだよ！」と、ミュージシャンのアレコレを教えてくれるのでした。ジャズには全く関心のなかった私には「知らない」ことばかりで、Hの話の一つひとつに感心するばかりでした（お父さんがジャズが好きで、CDを聴いたり、コピー版に書き込んで楽しむ様子に興味をもったのが始まりだったようです）。

そしてジャズへの興味は工作へとつながり、丸く切ったダンボールに「ぶるう・のーと　100」などとタイトルを書き、袋を作ってジャケット風にするというCD作りに熱中するのでした。また、クリス

マスには「ルー・ローズのDVD」をサンタさんにお願いし、「これ、とどいたんだ！」と満面の笑みで見せてくれました。その喜びは三学期に続き、ルー・ローズのDVDやお気に入りのブルー・ノート100をはじめ、ジャズのCD複写版作りを毎日楽しそうに繰り返すHなのでした（そんな中で、初めのころは「ぶるう・のーと」だったのが、その後「ブルー・ノート」になり、年長組になると「JAZZ・BLUE NOTE」となったのは、Hのジャズへののめり込み度と遊びの真剣さの表れといえるのではないでしょうか）。

そんなHのそばに、いつの間にかRがいるようになり、同じテーブルでそれぞれの工作をしたり、一緒にCD作りをしたりする姿が見られるようになりました。その光景は、Hのジャズへのウキウキした気分にRも自然に気持ちを弾ませていくような、二人の響き合いともいえる雰囲気が感じられ、「あっ、Rは一歩踏み出すかも?」と静かにワクワクした私でした。

そして予感通り、二人は一緒に遊ぶ時間が長くなり、年長組になってからは、登園後どちらからともなく紙やペン・セロハンテープを用意して工作に熱中したり、二人でストーリーを展開させながら絵を描いて笑い合ったりとかかわりを深めていき、そんなRに「ああ、やっとくすぶりが晴れた！」とホッとしたのでした。

（Hのジャズへの熱中ぶりはずっと続き、紙やペットボトルのふたでトランペット・サックス・トロンボー

ンを作って演奏会ごっこをしたりして、とても楽しく広がっていきました)。

Rは、Hに何を感じてそばに行ったのか？　Hの何がRのくすぶりを晴らすキッカケになったのか？それを改めて考える中で、私はやっと気づいたことがありました。それは、「Rにとってお母さんの存在は、いつも遊びを支えてくれる大きな力であり、遊びを楽しく広げるための大切なパートナーであった」こと、そのお母さんがいない幼稚園での不安・戸惑いは、私の想像をはるかに超えた深いものだったのだろうということです。保育者である私がお母さんに代わる存在になり得なかったのは事実ですが、それほどにRとお母さんの遊びを土台としたかかわりが強かったのだと思わされました。

Rは年少組の時から、降園後の園庭で、お迎えのお母さんに押してもらってブランコを高く・高くこぐ姿が、毎日のように見られました。その勢いと園でのくすぶりのギャップがずっと心に引っかかっていたのですが、「もっと！」とせがんで、見ていてハラハラするほどこいでいたのは、お母さんから離れて園ですごすRの「とびたい！」「くすぶりを晴らしたい！」思いであったのかもしれません。

その思いの高まった「時」が、Hがジャズで遊びを始めた時に重なったのか……。また、年少組の時のイメージとは違った「らしさ」を表し、一人で遊びを広げるHに何かを感じたのか……。いずれにしても、RとHの「らしさ」がふれ合う瞬間があって、園生活が一年以上も過ぎたところで二人は「新しく出会い」、遊びを通して響き合い・楽しさを共有してかかわりを深めていった歩みが残されました。そして、それは、「Rは、お母さんに代わる新しいパートナーを見つけた」と言えることだったのだと思いました。

園児一人ひとりの「らしさ」が花開くまでに、保育者としてどんな支え方・援助をしたらいいのかは、いつも手探りです。そして、「らしさ」がどんな花となるのかも予想通りではありません。でも、「あっ、この子の花が開いてきた！」と感じる瞬間の喜びが、保育の大きな励み・支えになって私の背中を押してくれるように思います。

幼稚園存続の危機ともいえる三年間をどうにか乗り越え、四年目は三十八名・五年目の今は四十二名と、少しずつ園児が増えてきましたが、一名の増減に一喜一憂の状況はまだ続きそうです。また、若い保育者と共に「遊びを大切にする保育」の充実のために日々の保育を積み重ねていかなければなりませんし、この保育の中での子どもたちの育ちを地域に発信し伝えることの難しさを、強く感じるこのごろです。

でも、こんな厳しい現実ではありますが、子どもたちの「笑顔いっぱい！　夢いっぱい！」を詞にして、幼稚園の歌もできました。先は見えないけれど、みんなが楽しく思いっきり遊び、育ち合う場でありますようにと願っています。

「希望の光」となった子どもたちも、もうすぐ、卒園・入学の準備をする時となりました。入園当初の幼さが懐かしくなるほど、幼稚園の一番上のお兄さん・お姉さんとしてたくましい存在です。Rだけでなく、はじけた笑顔で遊びを広げていく子どもたち一人ひとりの歩みを思い返す時、子どもの成長の尊さと、それにかかわる保育の仕事の重さを改めて感じさせられます。

少人数ではあっても、そんな子どもたちとの響き合いが、小さな園の歩みを進める力となって、保育の現場に立つ私たちを支えてくれて、元気を与えてくれるでしょう。

（公認・こもりや幼稚園）